

六本木と出会って、小説家になった

学生時代、酒が飲めなかった。

酒をおいしい、と思ったことがなかった。

初めて酒を飲んだのは、中学三年生のときだ。家には、中元や歳暮の、もらいもののウイスキーがごまんとあり、手をつけられることなく積まれていた。つまり私の親も酒を飲まなかったのだ。

当時私は、アメリカのハードボイルド小説にずっぼりとはまっていた。ハメットやチャンドラー、マツギヴァーンなどを読みふけていた。それ以前は、クイーンやクロフツ、クリステイなどの本格推理小説が好きだったのだが、あるときマツギヴァーンの『最悪のとき』という作品を読み、脳天に一撃をくらったような状態になって、一気にハードボイルドに傾斜していった。ちなみにこの作品は、今でも創元推理文庫からでている。

ハードボイルドの主人公は、よくウイスキーを飲む。ビールは苦い、日本酒はくさい、中学生の頃の私の、酒に対する認識といえばそんなものだ。

ウイスキーはいつだってどんな味だろう。

主人公たちは、心と体の両方で、ウイスキーをおいしいと感じている。ひよつとしたら、すぐくおいしい飲み物なのじゃないか。

だいたい小説の中でウイスキーが形容されるとき、「黄金色の」とか「琥珀こはくの」といった言葉が使われ、なんだかこの世のものとも思われない味に思えてくるのだった。

そこである日、私は柵の中で死んでいるボトルの一本を失敬した。探偵にならない、勉強機の奥にしまいこむ。そして家族が寝静まった深夜、グラスに水を入れて部屋にもちこみ、ついに未知の味に挑戦することになった。

はつきりと覚えているのだが、そのとき私は、水割りという、この日本では最もポピュラーなウイスキーの飲み方をしなかった。

いや、正確には知らなかったのだ。なにせ、小説の登場人物たちは、ストレートか、氷を浮かべただけで飲んでいただけからだ。

トクトクトク、と耳に心地よい音をたて、封を切ったばかりのボトルから、黄金に輝く液体がグラスに注がれた。一瞬私は、その美しさに見惚れた。

これがウイスキーなのか。

目の前にウイスキーを注いだグラスがあるだけで、自分が大人になったような気がして、しばらく私はグラスに見とれていた。

やがて、いよいよグラスを口に運び、唇にぴりぴりくる刺激を感じながら、舌の先でちょびっただけを舐めてみた。

ナンダ、コレハ！ である。この世のものとも思えぬまずさだ。煙くさい、としかいいよ  
うのない味。いや、味なんてものじゃない。はつきりいつて、その瞬間私は、このウイスキ  
ー腐ってんじゃねえか、と思った。  
もちろんアルコールであるからして腐る筈がない、と気づき、そして重大な事実思いあ  
たる。

すなわち、ウイスキーはまずい。

それから高校に進み、煙草を覚え、学生運動の最後の残滓をひきずっているような友人と  
ロック喫茶（というのがあった。暗くてロックががんがんに流れている。ツエッペリンとかキ  
ングクリムゾンとかELPとかだ）にいくと、たまにコークハイを飲むことがあっても、や  
はりウイスキーの煙くさが鼻につき、まずい、という思いはなくならなかった。

酒は結局、心臓をどきどきさせ、顔を熱くして、胸を苦しめるだけのものではないなかつ  
た。高校時代、かなり酒を飲む奴もいたし、酒が駄目だからとシンナーに向かう奴もいた。  
煙草だけはむちゃくちゃ吸ったが、酒はどうも駄目だな、と私は思いつづけていた。

大学に入ると、酒を飲む機会は増える。だがやはり苦手だった。同好会の新歓コンパで、  
モーニングカップになみなみとつがれたストレートのウイスキーを一気飲みさせられ、トイ  
レでひと晩苦しんだこともある。

酒は駄目だが、酒を飲む場所は嫌いではなかった。といつても、飲むことが主目的になる  
居酒屋などは嫌いで、洒落たバーやディスコは好きだった。特に、当時、原宿と六本木にあ  
った『プレイバツハ』という店は、内装が渋くて、大人の遊び場、といった感じで憧れた。  
ジャズが流れ、レンガのマントルピースにぶあついカーペット、ほの暗い照明の下を、モデ  
ルのような女性たちが静かに飲み物を運んでいる。  
偶然そこに足を踏みいれ、畏縮し、そして強烈な憧れを私は抱いた。  
場違い、という奴を味わったのだ。こうしたとき、その人間が思うことはふたつにひと  
つだ。

二度と近づくまい、と思うか、見ていろ、いつかここでかいツラをしてやる、と決心す  
るかだ。

私は後者だった。憧れる、ということは常にみじめさと裏腹だ。そんなとき、必ず、負け  
たくない、と私は思った。

虚勢である。だが、その虚勢なくしては、次の一步は踏みだせない。

\*

\*

\*

酒の話をつづける。『プレイバツハ』に初めて足を踏み入れたときに私が感じたみじめさ  
と強烈な憧れは、六本木という街に、東京へ出てきたばかりの私が感じた思いとそっくり同  
じだった。

私は名古屋で生まれ、育った。途中、父親の仕事の関係で二年ほど東京にいたことはある  
が、それは小学校の低学年のときなので、東京に関しては、地方から上京した学生そのもの

でしかなかった。

ただ、ふたつだけ、田舎出身としては有利な点があった。ひとつは、その前々年、つまり高校二年のときに、ある予備校の夏期講習を受けるために上京し、ひと月を過していたため、まるつきり初めての東京ではなかったということ。もうひとつは、上京し住むことになった場所が、当時父親が単身赴任でいた麻布十番のマンションで、六本木へは歩いて通える、という点だった。

予備校の夏期講習では、私は初日一日をでたきりで、あとは毎日、新宿に通っていた。

ジャズのライブハウスで有名だった『ピットイン』が、当時新宿には三軒あって、そのうちの一軒は、ジャズではなくロック喫茶だった。“アンパン”と“フーテン”の全盛期だった。新宿駅の東口に、ビニール袋をかかえた長髪のフーテンが何人も幽霊のようにつつ立っていた。初めて親もとを離れ、ひと夏を東京で過した私は、ここで“都会”という奴を少しだが強烈に味わった。その話はまたいずれ書く。

私が大学生として上京したのは、デイスコが最初のブームを迎えた頃だった。ファッションでいえば、アイビーとコンチしかなかったところへ、ニュートラという新しいスタイルが流行り始めた時期だ。

初めて入ったのは、新宿の『ニューヨークニューヨーク』、このときは鏡に向かって全員が同じ振りつけてひたすら踊るといふ新宿スタイルに圧倒された。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。